

豚の貯金箱は誤解の産物？ それでも大金を招く不思議

“豚に真珠”ということわざがある一方で、ほぼ三百年もの長い間、ヨーロッパで“豚の貯金箱”が人気を保ち続けているのはフに落ちないとおっしゃる方がある。

チャールズ・パナティという物書きさんで、そもそもはアメリカ・コロンビア大学出身の理学修士。だから、おっしゃることにもいちおうスジが通っているのだが。

たとえば、野性のイヌは、雨の日に備えて拾った骨を土の中に蓄えておくといわれる。また、リスがふだんからせっせと食料を蓄えておくのは周知のところ。

ある種の動物に、とりわけそんな本能がきわ立っていることは事実である。だが、ブタが儉約家だとか、有事に備える特殊な本能の持ち主だとかいった話は聞かない。

それなのに、豚の貯金箱は、お尻にコインの投入口をつけた子ブタの姿になっていて、人々は、真珠ならぬコインをせっせとこれに入れ続けてきたのである。

というのも“ブタに真珠”のことわざがある一方で、ヨーロッパでは、古くから“ブタは幸運をもたらす”といった言い伝えがある。

チャールズ・パナティ氏の真相究明によると、話は中世の西ヨーロッパ。当時、ヨーロッパでは金属類が不足し、金属製品は空前の高値をつけていた。



そのため、金属に代わって盛んに用いられたのが西ヨーロッパで大量に産出した“ピッグ”

(Pigg) という名の粘土。

つまり、この粘土の名と豚のピッグがそっくり同じだったのである。

もちろん、当時も“へそくり”は盛んに行われていたから、人々はこのピッグという名の粘土でつくられた壺にせっせとへそくりを貯め込んだ。

そのうえ、十八世紀ごろになると、陶工がこの“ピッグ・ジャー”を粘土の名と知らずに、いとも単純に豚の姿をした貯金箱に変えてしまったというのである。まさに、トンだ誤解だった！